

[エッセイ]

20世紀のわが同時代人

三 浦 義 彰

(33) 武見 太郎

武見太郎 (1904-1983) : 1930年慶応義塾大学医学部卒業, 内科教室に入局, 教授と折り合わず退職。1938年理化学研究所の仁科研究室でサイクロトロンから発生する放射線の生体に及ぼす影響について研究。1939年, 銀座に武見診療所を開設, 診療の傍ら心電計などを開発する。戦後新日本医師会の発足にあたり代議員になる。日本医師会副会長を経て1960年日本医師会会長に当選, 1981年引退。

ジャーナリズムの世界では武見太郎に「ケンカ太郎」というあだ名をつけていた。日本医師会長として厚生省に常に難題を吹きかけ、ケンカを売るのでこのあだ名をつけたようだ。このあだ名に対して武見さんの言い分は医師会の主張は決して難題ではなく、厚生官僚が無能だから、医師会が正しい針路を示しているのに過ぎないのだそうである。

「ケンカ太郎」は医師会長になる前からその傾向は既にあったらしい。その証拠にこんなこともあった。慶応大学卒業後入局した教室で教授と衝突したというのである。これは武見先生が教授のことを唯々諾々として聞くイエスマンではなかったからであろう。こういうご自身の経験から、他人が教授と衝突していて、苦境に立っていると聞けば、同情していろいろな便宜をはかってくれる。

私自身も同情された経験がある。それは国際学会の費用が足りなくてどこに寄付をお願いするか困っていた時、臨床医学や医師会とは大して関係が深くない基礎医学の学会なのに、ポンと日本医師会が多額の寄付をしてくれた。それも本来は学会の会長である教授自ら依頼に行くべきところだったが、事情あってまだ若手だった私が直接会長に頼みに行ったのが気に入られ、多額の寄付を武見会長から医師会の事務長に命じられたという。

武見先生は一面かなり自己顕示のうまい方でもあった。戦前の先端技術だったサイクロトロンの実験に武見先生が参加して、放射線の生物に及ぼす研究の先鞭をつけたという記事が医学ジャーナリズムの世界に言い伝えられている。しかし、私も当時はまだ学生だったが、東大脳研のショウジョウバエにサイクロトロンを当てて遺伝子の変異をみるために、命じられて理研に度々行ったが、ついぞ武見先生に会ったことはなかった。これは私だけではなくて当時理研で研究中だった東大生化学教室のT博士もあの当時理研の実験室では武見先生を見掛けなかったよ、と言っておられる。もっともサイクロトロンの実験など付ききりでいる必要もないから、要領よく研究されたのかも知れない。

戦前の1939年に開設された銀座の武見診療所には目につく張り紙に「現役の大將, 大臣, あるいは老齡の患者さん及び急患の方は待たずにすぐに診察いたします」とあった。これは忙しい人や急患, 老人を待たせない心遣いからいえば当然なのだが, 普通の患者さんがこれを見ると, この待合室に大臣, 大將がいるのではないかとあたりを見回すそうである。一方で武見先生はそんなエライ人を診るのかという尊敬の気をおこさせるのには役立ったようである。

こんなことばかり書くと武見先生を知らない人

は武見先生によい感情をもたなくなるかも知れない。私も実際にお目にかかるまでは大変な方だと思っていた。しかし、武見先生にお目にかかってみると、想像とは違ってなかなか出来た方であった。

私は東大の助手の頃から日本医師会の図書委員という役を命じられていた。これはまだ武見先生が会長になる前のことで、図書委員長だった緒方富雄教授の推薦によるものだった。私の専門は臨床医学ではなくて、地味な基礎医学の中でも比較的難解な生化学だったので、臨床医の集まりである日本医師会の図書を管理する人としては決して適任ではないと、何度もお断りをしたのだが、開業経験もある君をわざわざ選んだのだということで断りきれず、二十年以上もこの仕事を続けた。

さて日本医師会に新しく武見会長の就任が決まってみると、どんな人事になるだろうか、きっと慶応大学出身の臨床家が図書委員長になるだろうという私の予想に反して、私とその任に当たることになった。武見会長の人心収攬術のうまさは大変なものである。

同じく医師会の何かの委員長をしていた東大医学部の豊川教授が、学生騒動の最中に医学部長に無理にさせられ、毎晩、夜中に嫌がらせの電話に悩まされたことがあった。それが原因で豊川夫人が心臓発作で逝去されたこともあったのである。事態が少し収まったころ、武見会長から電話があって、今晚豊川君を慰める会を開くという。豊川教授は私の高校、大学の先輩だということを武見先生はとくに御存知で、この会には武見会長のほかは豊川、三浦だけであった。こういう会の取り仕切り方やその席での心温まる会話を聞くと、武

見会長はやはり「人事の武見」といわれ、日本医師会会長に再選される理由がわかるような気がした。こういう武見会長にも弱点らしいものもあった。それは若い時から話す外国語には縁遠く、通訳を必要とすること、国際的な慣例にはあまり慣れておられないことである。そのため日本医師会主催の国際会議などは国際感覚の鋭い田宮猛雄前会長などを表に立てておられた。何でもご自分で処理しようとはせず、要所要所にしかるべき人を起用して、その人々の意見を重視することは甚だ賢明な方法であった。

しかし、武見先生は読む方の語学は優れていて、しかも早読みだったらしい。日本橋の丸善で輸入した医学書を個人で一番たくさん買うお客さんは武見先生だと医師会出入りの丸善の係の人が話していた。しかもそれは書齋に積んどくだけの、いわゆるツンドクカではなくて、かなりよく目を通して、アンダーラインが引いてあったと、武見先生から本を借りた人が驚嘆していた。

ただ人の意見を聞きいれる場合に厳密に科学的であったかどうかは不明である。たとえば癌の治療にゲルマニウムがよいと信じこみ、ご自身もゲルマニウムを服用し、ややゲルマニウム中毒の気味であった。医者は自分が病気になると判断が公正ではなくなるためか、ゲルマニウムの効果を過大視しておられたようである。

武見会長が癌で入院中はゲルマニウムが癌を治してくれると信じ、治った時すぐ歩けるように足の筋肉の萎縮を防ぐため、ベットの上で両足を挙げて自転車漕ぎのような運動を続けておられたのはいたましかった。

(34) 茅 誠司

茅 誠司 (1905-1988) : 1898年神奈川県中津村の農家の次男として生まれる。高等小学、厚木中学、東京高等工業を経て、1923年東北大学理学部物理学科を卒業し、東北大学講師となる。1928～30年にドイツに留学、1931年には北大教授、1943年には東大教授兼東工大大教授、1949年東大理学部部長、1954年、日本学術会議会長 (1957-58)、東大総長 (1957-63)、1964年文化勲章受賞、小さな親切運動本部代表 (1963年～)

茅先生はもともと物理学者である。しかも生物物理ではなく、金属の物性が専門だから私の専門

とする生化学とは全く違う領域の研究者である。専門の異なる私が先生と初めてお会いした頃は、

先生は学術会議の会長や東大総長などの要職におられ、私自身はまだ東大助教授で、普通ならお目にかかる機会も少ないはずであったが、不思議なご縁で度々とお会いし、いろいろと引き立てて下さった。これが本当に「ご縁」と言うべきなのだろう。茅 伊登子夫人がYWCAの英語のクラスで家内と机を並べていたころ、1957年に国際酵素化学シンポジウムという、戦後二番目の国際会議を学術会議主催で開くことになった。私は会長の児玉桂三教授の下で会議の実際の運営の仕事に携わっていた。この会議は日本学術会議が主催することになっており、当時茅先生は日本学術会議の会長になられたばかりだった。私はこの会議の準備期間は殆ど毎日のように上野の学術会議事務局に出掛けたのである。その期間に自然と茅先生と折衝する機会も増え、またこのシンポジウムのレディース・コミティの結成の時は茅夫人が家内に対して助力を惜しまなかったのである。

その間、茅会長とともに大蔵省に予算復活の陳情に行った。茅先生は戦後間もなく文部省の科学教育局長を一年ばかり勤められた経験があり、官

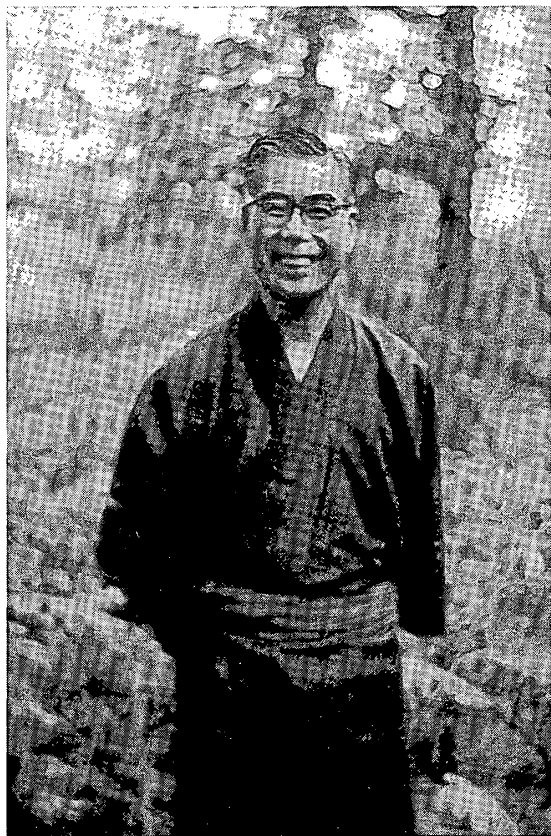
僚の操縦術がうまいとの評判もあった。なるほど頭を下げる所は下げ、主張すべき所はかなりハタタリをきかせて見事学術会議の要求通りの予算が獲得された。この方面に疎い私には大変よい薬だったと思う。

このシンポジウムは外国からの参加者は二、三十名と少なかった。何しろ戦後まだ十年余しか経過していないので、日本の復興もあまり進んでいなかった。しかし、一流の学者ばかりが集まって来た。

こうしているうちに私は東大医学部の生化学教室から小石川分院に新設された衛生看護学科に勤務場所を移されてしまった。事情はいろいろあったが、なにしろ大きな痛手は殆ど実験設備のない、学生実習室だけの所だったので、研究の続行も危ぶまれる状態であった。マウスやラットなどは本棚のなかに電熱器をいれて辛うじて寒さを防いでいたし、学生実習が始まると研究員の居所もなくなる有り様だったのである。

こんな噂がとうとう茅総長の耳にも届き、しばらく事態が収まるまで、ウイーンの原子力機関や、ニューヨークの国連に原子力関係の委員として出向しないかなどと茅先生は原子力委員だった関係でわざわざ声をかけて下さった。私はまだ実験科学に未練があったので丁重にお断りした。これに対して先生自身もお若い時は磁気の研究で北大時代は実験に夢中だったことも思い出されて、私のわがままを容認して下さいのみならず、時々外人のお客様を総長官舎で招待される時など家内もろとも招待して下さいこともあった。

衛生看護学科は東大医学部の鬼子みたいなもので、看護学などは学問ではないとか、看護婦には大学教育はいらないとか、始終医学部の古い教官からいじめられていた。一つにはその頃この科の入学者の最低の点が全学で一番低かったからでもある。そのため駒場の教養学部では特別なクラスを作っていた程であった。茅先生も東大総長としてこんな不平等な扱いに苦慮されていたのか、卒業式の後で運動場で開かれたパーティ会場で衛生看護学科卒業生の所に真っ先に来られて激励して下さい。今、全国に看護大学や看護科の大学院が開設されるようになり、衛生看護学科の卒業生が引っ張りだこの現状を、茅先生がご存命ならぜ



茅 誠司

び見て頂きたいものである。

茅先生は背の高いガッチリした体格の方で、大きな木が立っているような感じがする。「巨木、茅さん」(半澤朔一郎著)という本も出ているから誰もが大木を連想したのは無理もない。先生自身も大きな木がお好きで、かつて千葉大学に講演をしに来て下さった時も、帰り道に植木市に寄って、私に山法師の苗木を買って下さった。今、その木が二メートル位に成長して、春に先生のお好きな小さな白い花を咲かせている。青山のお宅にあがる度に山法師は咲いたかい、とお訊ねになっていたが、あの時はまだ木が幼くて花をつけなかった。先生が何でこんなに山法師に執着されるのかはその頃は知らなかったが、遺伝研の木原均先生が先達になって毎年「箱根樹木園山法師会」という山法師のお花見の会には先生はかかさず出席されていたそうである。

茅先生の残された社会的に一番大きなお仕事として残ったのは「小さな親切運動」ではなかろうか。私も八十歳を過ぎてからしばしば地下鉄の中で「おかけなさい」と小学生が私に席を譲ってくれる。ふと見ると胸に「小さな親切」のバッジがある。こういう時に茅先生の笑顔が思い出される。

香川県の仁尾中学校には茅先生の自筆を彫った「親切碑」があるそうである。その碑文は

ささやかな 勇気を出して
やろう うけよう ちいさな親切を

というのだそうだ。

電車内でお年寄りが席を譲られてもなかなか坐らない人が多い。席を譲られたら「うけよう、ちいさな親切を」とすなおにありがとうといって坐るのが気持ち良いことだ。

先生が小さな親切という言葉を使い始められたのは1963年の東大の第89回卒業式の総長告示の中である。学生運動に対して学生が責任のない行動をとることを戒められ、「たとえば学生の仲間が道路を汚しても、それを咎めることもしていない。もっと自分に出来る親切、たとえばゴミはくずかごに入れるというような小さな親切をしようじゃないか」といわれた。これを朝日新聞の「天声人語」欄がとりあげたのが、社会の関心を集めた始まりである。

天声人語はもとラテン語の vox populi, vox dei, 即ち「民の声は神の声」を訳したものだ。歴代の東大総長は卒業式には難しい言葉で分かりにくい告示をしていたのに、茅総長は幼稚園の卒業式の告示のような話をするという評判に対して、この告示はまさに「民の声」であると、天声人語が取り上げたものである。当時58歳の茅先生はまだ壮年だから、電車内で席は譲られなかったと思うが、当時のギンギンした社会に潤滑油を与えるべく「小さな親切」という言葉にその意図を凝縮されたのだと思う。

(35) 高田 美 (よし)

高田 美 (1916年-) : 仏英和女学校 (現白百合学園) 卒業 (1934年), 東京のフランス通信社 (AFP) 入社 (1947年), AFP 退社 (1954年), パリに転居, 木村伊兵衛の通訳をして以来, 写真に凝る。ピエール・カルダンの知遇を得てカルダンの作品の撮影をする (1955年)。以後, カルダンの右腕として各方面に活躍中。フランス政府から芸術文化勲章 (1985年), パリ市名誉銀章受領 (1989年)

私が小学校に入学した頃は父の家は駿河台の袋町という所にあった。現在は明大の校舎が建てられている。家の玄関の横に大久保彦左衛門の井戸と称するものがあり、昔はこの一帯が彦左衛門邸だったらしい。父は私に早くからフランス語を習わせた。三崎町の仏英和幼稚園に入れた。入学式に母に連れられて行ってみると、白い大きなボン

ネットをかぶったフランス人の尼さんが変な日本語で話しかける。ボンネットの下顔をみると猫の髭の様な髭が一、二本生えていて気味が悪く、以来毎朝幼稚園に行きたくないといくづって母を手こずらした。

そのうち、私は大病をして、大学病院に半年も入院していたので、一年目はろくに幼稚園には通っ

ていない。二年目になっても、あまり私がぐずるものだから、母が一計を案じ近所の知り合いのお嬢さん達に朝迎えに来てもらって、通園することになった。高田さんは私を迎えに来る二、三人のうちの一人だったのである。

高田さんの家は駿河台の坂の中ごろにあり、お祖父様が創った総合商社の高田商会のお嬢さんで、後にこの商会は破産したが、その頃はまだ盛んな時代だった。美さんのお祖母さんは父の患者さんで、私を可愛がり、幼稚園の卒業祝いといって私にラドーの腕時計を下さったのにはびっくりした。小学生の私にはまだ贅沢な腕時計は早すぎるといって、母はしばらく仕舞い込んでしまったほどである。

幼い私はこの賑やかなお迎えに気をよくして、それからは毎日幼稚園にせっせと通ったようである。しかし、幼稚園時代にどんな遊びをしていたかは記憶にない。けれども後に高田さんやフランス人の尼さんから聞かされた話ではがき大将だっ



左：三浦義彰、右：高田 美

たようである。

この時代から約六十年程がお互いに別の道を通じて過ぎていった。全然消息がなかったわけではない。美さんの同級生から、高田商会が破産し、戦後は生活のためにフランスの通信社に勤めていること、突如パリに渡って写真家になったこと、ピエール・カルダンに認められ、その右腕として活躍していることなどが、本当に風の便りに私の耳にも入っていたのである。境遇の変化に順応してパリで新しい道を開いて行く高田さんの勇氣に私は密かに日本から応援の拍手を送りたいと思っていたが、肝心の現住所が分からず、激励の手紙は出さなかった。

1979年に私はフランス政府からシュバリエ・ド・オールドル・ナショナル・ド・メリット勲章を贈られた。これという業績もないはずなのに、日仏両国間の学術交流に功績があったということで、あり難く頂戴したのである。私は元来、賞というものに縁がなく、それまで頂いたのは旧制中学の卒業の時の優等賞だけで、これとても、クラスのトップクラス、たとえば久宗高（たかし）（後の水産庁長官）、串田孫一（文筆家）、谷村裕（ひろし）（後の大蔵次官）などが四年終了で高校に入ってしまう、私が取り残されたゆえに過ぎない。

この受賞のすぐ後で、私は学術振興会からフランスに留学中の医学・生物学の研究生の実態調査という名目でフランスに3週間ほど出張を命じられたのである。パリに滞在中週末を利用してスイスの友人を訪ねるためスイスエアに乗ったら、コーヒーと堅い板チョコがサービスされた。そのチョコレートをガブリと噛んだ瞬間なんと私の前歯が二本、チョコレートの方に移ってしまっていた。前歯を失って歯なしの爺さんのまま旅をおえてパリに帰り、さて夕飯はどこか軟らかいものを食べさせる店を探そうとホテルを出たら、夢のような話だが向うから、写真では見えているが、実物には60年も会っていなかった高田さんが歩いてくる。奇遇に驚くと同時に、高田さんが私の前歯が抜けているのに気づいて「随分お爺さんになったわねえ」というご挨拶である。事情を話したところ、「うちへいらっしゃい、おじやを造ってあげる」ということになった。ホテルの向こう二、三軒隣が彼女のアパートだったのである。

夕飯の後で、私の勲章受賞の話になり、高田さんの意見によると、誰か私の友人がフランス政府に働きかけて受賞が決定したのだから、その人達にお礼のパーティを開いた方がよい、それがフランスでの習慣ですと言うので、日本食のパーティを開くことにした。ただし、私が歯なしの爺さんなので、高田さんにホステス役をしてもらうのはどうかと相談したら、高田さんはもう一人男性のホストとして、共同通信の松本パリ支局長を推薦したのでお願いすることにした。松本さんのフランス語はフランス人と変わらないという。

この計画はうまくいってフランスの代表的な生化学者が日航ホテルに夫人同伴で集まり、歯抜けの私はただニコニコしているだけで、後は高田さんと松本さんがとりしきり、会話もはずんでなかなかよい会だった。

次回のパリ訪問はそれから間もなくだったが、この時はカルダンが私たちを昼食に招待してくれて、60年ぶりの私たちの再会を祝ってくれたり、彼の最近のコレクションの会に招待された時には、折からNHKの取材にきていた磯村さんからあなたも服飾の専門家ですかと質問されたり、ふだん研究室まわりしかしない私のパリ訪問を華やかなものにしてくれた。

1985年には高田さんが芸術・文化の勲章をフランス政府から頂いておられる。おそらくホスト役はカルダンが勤めてお礼のパーティを開いたのではあるまいか。

カルダンが何故高田さんの才能に惚れ込んだのか、誰もが知りたい点であるが、私はこう思っている。高田さんは幼い時から第一級の美術品に取り巻かれて育った。丁度質屋の小僧が最初の修行の間は本物ばかり見せられていると、不意に偽物が現れた時、「ああ、これは違う」と本能的にわかるのと同様に、第一級の本物の美術品に囲まれて育つと、たとえ日本の物でなくて、カルダンのデザインしたものでもこれはいいものだということが本能的に分かるのではなかろうか。カルダンも天才だけに高田さんのこの鑑識力を高く評価したのであろう。

1995年の冬、高田さんの「パリの記憶」という写真の展覧会が東京のプランタンで開かれ、同時に京都書院から同名の写真集が売り出された。白黒の写真が100枚ばかり、パリの裏町の憂愁を伝え、あるいは著名人の思いがけない表情をたたえている。去年の彼女のクリスマスカードにはベランダに住み着いた鳩が蓬々パリから季節の言葉を伝えてきている。